

Yanow, D. and P. Schwartz-Shea (2010) “Perestroika Ten Years After: Reflections on Methodological Diversity”, *Political Science and Politics*, Cambridge University Press, 43(04), pp. 741 - 745.

Yanow, D. and P. Schwartz-Shea (2010) 「10年後のペレストロイカ：方法論的多様性に関する考察」 pp. 741 - 745.

### ➤ 紹介文

本稿は、解釈的手法並びにその哲学的基礎を専門とする Dvora Yanow と、政治学を専門とする Peregrine Schwartz-Shea の共著による論文であり、両者による解釈的手法の明確化を試みた書籍（『解釈的リサーチデザイン(2012年出版)』）の2年前に公表された論文である。当該論文では、アメリカ政治学会において生じた定量的手法と解釈的手法に関する論争（「ペレストロイカ」論争）とその影響を、年表を用いて振り返るとともに、論争以降に進展した「政治学研究の多様性」の内容が示されている。

### ➤ 概要

- 「ペレストロイカ(Perestroika)」とは、2000年にアメリカ政治学会(American Political Science Association：通称 APSA)の学会誌編集責任者に向けて送信されたメールの、差出人の名称である。
  - メールは、学会内における「政治的な問題提起」を行うものであり、学会の主要職人人事における「人種」的偏向、東海岸に代表される特定大学の影響力の大きさ、APSAにおける定量的手法への偏重を批判し、政治学の「学問領域に真の改革(Perestroika)がもたらされることを望む」と主張する内容であった。
  - メールは、アメリカにおける「自然科学をモデルとした、政治学の『科学化』」を試みる研究潮流と、解釈的手法を重視する研究潮流との論争の発端となり、学会内で大きな学問的反響を呼んだ(小野 2011)。
- 本稿では、ペレストロイカ以降の過去10年間における学術的变化を、年表を用いて確認し、アメリカ政治学会(APSA)における方法論的多様性の進展を評価する。

### ➤ はじめに (741)

- ペレストロイカの発端となった主要な懸念の1つは、アメリカ政治学(研究論文、教育カリキュラム、研究ポスト)において、定量的研究が大きな影響力を有するとともに、

定性的並びに解釈的アプローチが排除されていることにあった。

- 本稿では、ペレストロイカ以降の過去 10 年間における学術的变化を、年表を用いて確認し、アメリカ政治学会 (APSA) における方法論的多様性の進展を評価する。
  - 本稿では、特にペレストロイカに端を発する方法論的課題(Methodological matters)をめぐる重要な出来事や学術活動の年表を提示する。
  - ただし時間・空間的な制約のため、概略的かつ簡潔な説明にとどまっていること、また年表には、政治学内外における長年の「定性的-解釈的」研究の伝統が十分に反映されていないことを断っておきたい。

➤ **方法論に関する年表(A method-oriented timeline) (741-742 頁)**

- **1999 年**
  - 3 月：西部政治学会年次大会 (Western Political Science Association Annual Meeting : WPSA) が方法論の教科書編纂のためにデータ収集を開始
  - 春：カリキュラム研究(curricular study)のためのリサーチデザインの作成
- **2000 年**
  - 3 月 24 日～26 日：Schwartz-Shea and Yanow による WPSA 年次大会での報告
    - ◇ 議題："Is There Breadth in Methodological Training for Graduate Students in Political Science?"
  - 10 月 15 日：ペレストロイカの E メールが送信
- **2000~1 年**
  - Yale 大学博士課程学生による政治学部における定性的方法論の指導を求める運動の展開
- **2001 年**
  - 4 月：APSA 理事会による、学問領域に方法論的多様性をよりよく反映させることを目的とした「Perspectives on Politics」創設案の承認
  - 9 月：第 1 回ペレストロイカ組織会議における 2 つのラウンドテーブルの実施

- ◇ 議題：“Political Science Methodology and Perestroika,”  
討論者：Peregrine Schwartz-Shea（議長）、Hayward Alker、Alexandra Cole  
Kathy Ferguson、Melissa Harris-Lacewell、Meredith Weiss
- ◇ 議題：“Shaking Things Up: Future Direction in Political Science”  
討論者：Kristen Monroe（議長）、Russell Hardin、Robert Jervis、Elinor Ostrom、  
Susanne Rudolph、Marion Smiley、Rogers M. Smith

- 2002 年

- ・ 1 月：定性的手法に関する研修機関の設立と第 1 回セッションの実施  
(Institute for Qualitative and Multi-Method Research：現 QMMR)
- ・ 3 月：WPSA 年次大会でのラウンドテーブル
  - ◇ 議題：“Methods, Methodology, and Perestroika: Qualitative versus Interpretive Methods”  
討論者：Peregrine Schwartz-Shea（議長）、Hayward Alker、Kathy Ferguson、  
Kamal Sadiq、Meredith Weiss、Dvora Yanow
- ・ 4 月：中西部政治学会(Midwest Political Science Association：MPSA)での年次大会
  - ◇ 議題：“Is American Politics Fixated on Quantitative Methods? The View from Perestroika”  
討論者：Peregrine Schwartz-Shea(議長)、Georgia Duerst-Lahti、Mark Graber、  
and Dorian Warren
- ・ 6 月：方法論に関する以下の論文の公刊
  - ◇ “‘Reading’ ‘Methods’ ‘Texts’: How Research Methods Texts Construct Political Science,” *Political Research Quarterly* 55 (2): 457-86.

- 2003 年

- ・ 3 月 29 日：WPSA 年次大会での解釈的アプローチに関するワークショップの開催  
(Schwartz-Shea and Yanow の共同主催)
  - ◇ 議題：“Interpretive Research Methods in Empirical Political Science

Workshop,”

主催：Schwartz-Shea and Yanow の共同主催

- ・ 春：定性的方法論に関するニュースレターを開始
  
- ・ 7月：方法論に関する以下の論文の公刊
  - ◇ Peregrine Schwartz-Shea and Andrew Bennett, “Symposium Introduction—Methodological Pluralism in Journals and Graduate Education? Commentaries on New Evidence,” *PS: Political Science and Politics* 36 (3): 371–72.
  - ◇ Peregrine Schwartz-Shea, “Is This the Curriculum We Want? Doctoral Requirements and Offerings in Methods and Methodology,” *PS: Political Science and Politics* 36 (3): 379–86.
  
- ・ 9月：APSA 年次大会におけるペレストロイカ運動の評価に関するラウンドテーブルの実施
  - ◇ 議題：“Assessing the Perestroika Movement in Political Science”
  - 討論者：Kristen Monroe (chair)、Leslie E. Anderson、Samuel H. Beer、Martin O. Heisler、Timothy Luke、Kamal Sadiq、Sanford Schram、Peregrine Schwartz-Shea and Joanna Scott
  
- 2004年
  - ・ 方法論に関する以下の書籍の出版
    - ◇ Henry E. Brady and David Collier, eds, “Rethinking Social Inquiry: Diverse Tools, Shared Standards”
  
  - ・ 9月：APSA 年次大会における政治学方法論に関するラウンドテーブルの実施
    - ◇ 議題：“Making Political Science Matter”
    - 討論者：Dvora Yanow (chair)、Mary Hawkesworth、Timothy Luke、Ido Oren and Peregrine Schwartz-Shea
  
- 2005年
  - ・ WPSA における解釈的手法に関するセッションの設立

- 国際研究協会－北東部(International Studies Association–Northeast)における解釈的アプローチに関する大学院生を対象としたワークショップの開催
  - ◇ 議題：“Graduate Student Workshop on Interpretive and Relational Research Methods and Methodologies,”
  - 主催：Patrick Jackson
  
- WPSA 年次大会における方法論カフェ(Methods-Cafe)の開催
  - ◇ 主催：Dvora Yanow and Peregrine Schwartz-Shea
  
- 方法論に関する以下の書籍の出版
  - ◇ Alexander L. George and Andrew Bennett, “Case Studies and Theory Development in the Social Sciences” (Cambridge, MA: MIT Press).
  - ◇ Kristen Renwick Monroe, ed, “Perestroika! The Raucous Rebellion in Political Science” (New Haven: Yale University Press).
  
- **2006 年**
  - APSA 年次大会における方法論カフェの開催
    - ◇ 主催：Dvora Yanow and Peregrine Schwartz-Shea
  
  - 下記の書籍の出版
    - ◇ Gary Goertz, “Social Science Concepts: A User's Guide” (Princeton: Princeton University Press).
    - ◇ Mary E. Hawkesworth, “Feminist Inquiry: From Political Conviction to Methodological Innovation” (New Brunswick, NJ: Rutgers University Press).
    - ◇ Sanford Schram and Brian Caterino, eds, “Making Political Science Matter” (New York: New York University Press).
    - ◇ Dvora Yanow and Peregrine Schwartz-Shea, eds, “Interpretation and Method: Empirical Research Methods and the Interpretive Turn” (Armonk, NY: M.E. Sharpe).
  
- **2007 年**

- ・ 方法論に関する下記の書籍の出版
  - ◇ John Gerring, “Case Study Research: Principles and Practices”(Cambridge: Cambridge University Press).
  - ◇ Audie Klotz and Cecelia Lynch, “Strategies for Research in Constructivist International Relations”(Armonk, NY: M.E. Sharpe).
- 2009 年
  - ・ アメリカ国立科学財団による解釈的方法論のワークショップの開催
    - ◇ 議題: “Workshop on Interpretive Methodologies in Political Science”
  - ・ APSA 年次大会における解釈的アプローチに関する最初のパネル会議
    - ◇ 会議名 “Interpretive Methods and Methodology Conference Group”
  - ・ 方法論に関する以下の書籍の出版
    - ◇ Edward Schatz, ed, “Political Ethnography: What Immersion Contributes to the Study of Power”(Chicago: University of Chicago Press).

➤ 年表に基づくペレストロイカの影響とその評価 (742-743 頁)

- ペレストロイカ以降の定性的方法論者は、政治学の学術的制度（教育カリキュラム、学術誌、学会支部、教員人事等）に対し、より多元的なアプローチを採用するように働きかけた。
  - ・ 特に 2003 年 7 月のシンポジウムとその報告書(Schwartz-Shea and Bennett)は、教育カリキュラムや学術誌が定量的手法以外の方法に対して閉鎖的であるというペレストロイカの主張を裏付ける体系的な証拠を提示した。
- 2002 年における定性的方法論に関するセッションの(QMMR)設立以降、定性的手法に関するパネル・ラウンドテーブルが今日にかけて増加していることを確認した。
  - ・ 2003 年には定性的手法に関する 6 つのパネル・ラウンドテーブルが設けられ、2004 年には 12 へと倍増した。その後、年間約 26~7 程度のパネル・ラウンドテーブルが設けられるに至った。
- 以上の動向から、APSA における方法論的多様性を確保する試みは、「成功」している

ように思われる。ただしその多様性を確保する試みにおいては、次節で述べるようないくつかの懸念が存在する。

➤ 頭上の暗雲 (743-744 頁)

これまでの検討では、ペレストロイカ以降の政治学の方法論的多様性への関心の高まりを年表とともに確認した。本節では、今後の定性的・解釈的研究の発展に関する懸念点について検討する。

- 学術ジャーナルにおける制約について
  - ・ 年表で提示した定性的手法に関する書籍は、定性的・解釈的研究の深さ(depth)を示している。しかしこれらの定性的・解釈的研究に対する関心の高まりの一方で、学術ジャーナルにおいては、定性的研究の多くが対応できないような方法で研究の再現性(replication)を求める動きが再燃している。
    - ◇ 例えば、American Journal of Political Science(AJPS)は、投稿論文の最初の脚注に「研究において使用したデータは、その再現を目的とした研究に対して入手可能であること」に関する明示的な記述を求めた。しかし、解釈的・定性的研究で用いるデータは、現場で生成されたデータに依存することが多く、たとえ再現性に問題がないとしても、他の研究者がアクセスしやすいような方法で保存することは困難な場合が多い。
  
- 研究の審査委員会における規制について
  - ・ 多くの研究者が指摘するように、研究審査機関・委員会 (institutional review boards : IRB) を討論者する多くの委員が、定性的方法論について理解に乏しく、その代わり、定量的手法の研究手続きに準拠するよう研究者に要求している現状がある (Katz 2004; Yanow and Schwartz-Shea 2008)。
  
- 新公共経営(ニュー・パブリック・マネジメント)と生産的指標について
  - ・ イギリス、EU、カナダ、オーストラリア等の国では、大学や研究者をランク付けするための様々な生産性的指標が開発されてきた。こうした「エビデンスに基づくマネジメント」や「新公共経営」の文脈において活用される評価ツールは、しばしば定性・解釈的研究を敵視してきた。
    - ◇ こうした手法は、定性・解釈的研究の鍵となる論文の長さを短縮することを

研究者に期待しているとともに、定量的手法を用いた研究に有利となるように働く可能性がある。

- ◇ フィールドワークなどの長期的な研究プロジェクトを伴う研究を行う場合、短期的な出版量が少なくなることから、昇給に影響したり、「生産性」に基づいた研究選択が推奨される等、研究者の研究課題の決定に影響を与える可能性がある。

- 学問的正統性 (Legitimacy) への不安について

- ・ 定性的方法論に対する関心の高まりの一方で、非定量的研究者の一部はそうした方法が、学問分野内で十分な正統性を獲得していないと感じている。

- ◇ 2007 年には方法論セクションのリーダーが、セクションの名称を「Mixed Methods」に変更した。この変更は、定性的方法と定量的方法は同じ評価基準を共有しているという Brady and Collier の主張 (Reference Brady and Collier2004) に合致するものであった。このような名称変更に見られるように、定性的手法の学問的正統性の問題は、依然として解決していない状況にある。

➤ **結論 (744 頁)**

- ペレストロイカは、学会でのセクション増設に見られるように、アメリカ政治学の方法論的な多様性の確保に、肯定的な影響を与えたと評価することができる。
  - ・ しかし、Kasza の分析や大学院生の主張に見られるように、定性的・解釈的研究プロジェクトに対する十分なサポートが存在しているわけではない。
- ペレストロイカは、方法論的な「多元主義者」が互いに会う場を提供することで、興味深い議論や方法論的發展を促した。しかし、上述したいくつかの懸念に見られるように、この分野はより強力なペレストロイカ (改革) を必要としている。

➤ **参考文献**

小野耕二, 2011, 「政治学の再検討と紛争処理論の意義 : シリーズ 紛争処理過程の政治学的分析 4」『名古屋大学法政論集』 237 巻 : 253-284 頁.